

- 原著 -

小中学校新学習指導要領（文部科学省）における口腔衛生教育の実践的な研究
総合的な学習導入における，学外支援者としての授業形態の比較について

鞍立常行，岩久正明

新潟大学大学院医歯学総合研究科・
口腔生命科学専攻・口腔健康科学講座・う蝕学分野

Division of Cariology, Department of Oral Health Science, Oral Life Science Course
Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences

Tsuneyuki Kuratate, Masaaki Iwaku

Practical study on the education in oral hygiene according to the New Course of Study for Elementary and Junior High Schools by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology: Evaluation of the style of classes taught by out-of-school supporters in the introduction of integrated learning

平成14年10月25日受付 10月25日受理

Key words : 新学習指導要領，総合的な学習，口腔衛生教育，T-T方式

Abstract: With the introduction of "integrated learning" started in 2002 on the basis of the New Course of Study, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, the importance of involvement of those engaged in dental care in education of oral hygiene has increased further, and new perspectives of educational concepts and techniques are wanted. In this study, to effectively conduct education in oral hygiene through systematically formulated classes, we tested various model classes of oral hygiene as out-of-school supporters in cooperation with members of the school staff including homeroom teachers and school nurses, compared different class styles, and carried out a questionnaire in school nurses about how education in oral hygiene should be conducted to envision new class styles. Goals set for each class could be achieved by conducting the class in cooperation with members of the school staff. The results of the questionnaire indicated that school nurses seek expert guidance and cooperation by dentists. From these observations, we consider that the Team-Teaching method should be regarded as the first choice and that the class style should be selected according to the size and situation of the school, principles of school and class management, and the attitude of the dentist toward teaching classes for dentists to be involved in education in oral hygiene in elementary and junior high schools and to smoothly teach classes as out-of-school supporters. It was also indicated that school nurses at elementary and junior high schools wished education in oral hygiene to be implemented and considered guidance by dental specialists to be indispensable for its effective implementation.

抄録：平成14年度から開始された文部科学省新学習指導要領における「総合的な学習」の導入によって，歯科医療従事者の口腔衛生教育への参画の重要性は益々増加し，その認識と教育技法についての新たな視点が求められている。今回，筆者は口腔衛生教育指導を系統立てた授業形態で効果的に進めることを目的とし，学外支援者として，学級担任，養護教諭などの学校関係者との連携によって各種の口腔衛生教育の授業例を試み，その授業形態を比較すると共に，養護教諭を対象にして口腔衛生教育の取り組みに対するアンケート調査を行い今後の新しい授業形態のあり方について検討した。

その結果，学校関係者との連携をしながら授業を進めることによって，それぞれの授業で定められたその目標の達

成が可能であった。また、アンケートの結果、養護教諭は、専門家である歯科医師による指導、協力を希望していた。

これらの考察並びに結論として、学外支援者として、歯科医師が小中学校の授業における口腔衛生教育を実施する為の授業形態の選択として、まず、第一選択として、Team-Teaching方式を基本とし、その学校の規模・実態、学校・学級経営の方針、そして、歯科医師の授業の取り組みを総合的に判断して、授業形態を選択することが、円滑かつ効果的に授業が進められる要件と考える。また、小中学校の養護教諭は、口腔衛生教育の実施を望み、その為にも、専門家である歯科医師による指導が不可欠との認識をもっていることが示唆された。

緒 言

校内暴力、家庭内暴力、いじめ、不登校、学級崩壊、現在、教育の現場は混迷を極め、もはやその教育の問題は、単に教育の現場だけの対応のみではなく、日本の社会全体の問題として捉え、その解決に対しては、社会全体での取り組みの必要性が唱えられている。その観点から、従来、義務教育においては、その教育のフィールドが学校一辺倒であったものが、地域、家庭そして学校の三者の連携へと、その求めるところが変化し、従来、教育の分野に接する機会の少ない人も、地域の一員という立場で、いろいろな形で教育に参加、参画する必要性が出てきた¹⁾。

また、従来の知識取得中心の教育から、真の意味での「生きる力」を求めて改定された、平成14年度から開始されている新学習指導要領²⁾の中においては、その総則の中で、「生きる力をはぐくむことを目指し、自ら学び、自らが考える力を図るとともに、基礎的・基本的内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努める。(中略) 体育・健康に関する指導、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるように配慮する」とあり、学校教育の視点からも、更なる、健康教育、衛生教育の充実に説いている。

これらの点から、口腔衛生活動の一環として、学校教育、社会教育の現場にも接する歯科医師は、教育という視点からも、自らの課題としての認識が必要となってきた^{3)~7)}。

一方、歯科診療が従来のcureからcareに変化し、そして、8020運動を中心とした生涯衛生教育、特に、学童期における健康教育の重要性が唱えられ、地域の公衆衛生活動の一環として、学校歯科医という立場で経験的に実践がなされている⁸⁾。しかしながら、学童のその中心的な支援者である学校サイドから見たとき、従来のこの指導方法は、新学習指導要領にも従来の教育方法の問題点として指摘されているような、口腔衛生の知識の取得に重点に置かれ、かつ、その併せもつおのおのの学校経営、学級経営への継続的な効果への配慮がなされていないのが現状である。

特に、今回の新学習指導要領で新設された「総合的な学習」の導入によって、今後更に、口腔衛生教育への参

加、参画が増加することが予測される中、従来の授業の技術的な検討に加え、継続的な教育効果をもねらった複眼的な、新たな教育の視点を求めた口腔衛生指導の確立が必要となってきた。

筆者は、この点に注目し、これまで、学校歯科医という立場というだけではなく、地域の一員として、小中学校において口腔衛生指導を実践してきたが^{9)~12)}、今回は、今までの経験的な実践を、系統立てた授業形態を進めることを目的として、筆者が、今まで実践的な取り組みとして、口腔衛生教育の知識を有する専門家、そして、地域の一員という立場で学外支援者として参画、参加し、学級担任、あるいは養護教諭などの学校関係者との連携しながら実践してきた口腔衛生教育のいくつかの授業事例を、その授業形態別に比較検討すると共に、養護教諭を対象として実施した口腔衛生指導の取り組みに対するアンケートの結果についても参考として、今後の新しい効果的授業形態のあり方について検討した。

実践活動の対象と方法

1・授業の企画と決定のプロセス

今回、実践を進めるにあたって、筆者が「学校側に授業の実践を本研究の為に依頼する」、また、筆者が「学校側から口腔衛生教育の授業を依頼される」、そのいずれの場合においても、学校経営の責任者であり、それを掌る校長を通じてその実施の決定をした。これは、本研究において区分した、いずれの授業形式の選択においても、その実践を円滑に進めるスタートラインとなるものである。

現行の小中学校のシステムでは、その学校の権限の全ては校長の下にあり、歯科医師側から要望する授業の実施においては、その効果が未知数であり、生徒の貴重な授業時間を使うことを考えた時、その許可を得なければ実施は不可能である。

まず、校長に実施の許可を求め、それが得られれば、その実施の可能性が生まれる。また、学内、学級内の状況を熟知している校長に相談することによって、学内支援者としての担当責任者、そして、学外支援者としての歯科医師の授業経験、時間的な都合などの環境を考慮に入れた、その授業形態の選択が容易となる。したがって、本研究においては、授業実施を決定した後、その授業を